

あとがき

いうまでもなく、大平正芳自民党幹事長は、次期自民党総裁、ということとはとりも直さず次期総理のもっとも有力な候補者である。政局が動意をはらみ、その帰すうが注目されるとき、その中心の座にある政治家との対談ともなれば、話は勢い生臭い問題にふれざるを得なくなりがちである。だが、この対談では、つとめて、そうした点は避け、もっと根底にある政治家大平、人間大平の実像を、なるべく多くの人々に知ってもらおうよう、率直な質問を試み、その人間像をハッキリさせようとした。

結果はどうか。歯切れが悪い、口が重いつつ世間のイメージとは逆に、大平さんは、決して饒舌ではないが、慎重な言葉選びのもとで、一語一語、かみしめるよう、この際いふべきこと、考えていることを、かなりハッキリと語り、本音を吐露してくれた。

国際情勢、国内政治、防衛、経済といった、日本がいま選択を迫られている重要ないくつかの課題に対しても、大平さんは複眼的思考で、バランスのとれた見解を打ち出してくれた。この過不足のない中庸の態度は、これから政争に臨む政治家としては、ある意味ではマイナスであろう。パンチの不足を嘆くファンもあるのではないか。

しかし、その平衡感覚と、深い思索や読書に裏打ちされた史観は、大平さんをして、安心してこれからの日本の運命を任かせるに足る政治家にしていると思うが、どうであらうか。

この対談にモノ足りなさがあるとすれば、それは主として聞き役の勉強不足によるもので、話し手の責任ではない。なぜなら、学殖と経験に富む大平さんは、深く問えば深く答え、強くつけば強く鳴る、興行きの深い存在だからだ。政局多忙な折にもかかわらず、貴重な長時間をさいていただいた大平さん、及び出版社の方々に改めて感謝の意を表したい。

昭和五十三年八月

田 中 洋 之 助